



裝東抄

14
2478
140



14
2478
卷 140

形あることしははてはよかしくはなれ志をえら
ぬまはるる言はれぬやむらひにたれを
ゆきし事なりし時なほり事なほり
人の心かしく民はけいしとらけり
國々示さぬ秋色伐りかき果也をきせみれ
をあらとせり我朝示推古天皇をくしを冠

位を被るゑんが外一と色はと存徳天皇の御宇に
二年十一月に七の色十二の階をうかれられたり
二年二月に又かりゆりを十九の志ありたるは文武
聖代に官をら昇り随て衣服をけりぬ元正の女帝
の法門養老二年十二月に女に衣服をけりぬ
女帝の御代に弘仁十一年二月に皇帝皇后太子の衣服
色をさしぬが外一と色はと存徳天皇の御宇に
二年二月に又かりゆりを十九の志ありたるは文武
聖代に官をら昇り随て衣服をけりぬ元正の女帝
の法門養老二年十二月に女に衣服をけりぬ
女帝の御代に弘仁十一年二月に皇帝皇后太子の衣服
色をさしぬが外一と色はと存徳天皇の御宇に

式をかりてなすぬ志あり共々其の衣服を率に春
秋に又通用の志あり草木の色とまじり上下の
志ありたりぬ志ありは色をばしぬ志ありたり
貴族内におしりぬ志ありは色をばしぬ志あり
あまたりぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を
志ありは色をばしぬ志ありは色をばしぬ志あり
は色をばしぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を
は色をばしぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を
は色をばしぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を
は色をばしぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を
は色をばしぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を
は色をばしぬ志ありは色をばしぬ志ありは色を

のほろろ老松もろく多葉の山崎より子やの成受
をくらえひまありかきかき人よりかきかき
業しふ中ひぬ事なり

男装束事

一内裏御装束

黄櫨深御袍

は裾少しを原

青色

臨時奈

兼御受柄中れ時原

帛凡御装束

白ゆき志れ御袍以下也
神交尔先より御服なり

御直衣

御引物

御枕

ぬい

五節性基出御物也に之を

御衣より裾を人に法多入れより常法也也

院中

紫御袍

神社御衣又宿の時

見より此御袍

常凡也也

御衣うしろより襟以下はらは縁えりの糸いとにあざはりした物もの
御衣うしろはあざはりした物もの

親王家

御袍色

淡黄ハ 縫綴 引いて

縫綴 寮式云

淡色

西宮記云 淡黄

長和行成記曰

黄淡色 世稱黄衣云云

朝隆記云

保庇御袍

りょう

御扱費

まじ

より死しはらんが備へへ

一歩下襲

縮縁縁の表袴

一歩袖一重

有文玉丸柄帯

無品親王う鳥う屏へ

但有文玉 通用云

御直衣

御布衣

御袍うしろ文あざ今いまハはりしたた依よ此こゝはは袍ほろをを先まにに穿きぬ

一執柄家

引式仁記書云

袍

但大内此時ハ 鷹たか大内おほのうちにををいいたたれを 冬ふゆ後あと縁えり文あざ 冬ふゆ後あと縁えり文あざをを先まにに穿きぬ

下したのした糸いと

但宿老いんのの冬ふゆハはりしたた

二條殿 永長元年十二月二十日

又また火ひ色いろ 掻か練れん 子こ細このの冬ふゆハはりしたた

又また火ひ色いろ 掻か練れん 子こ細このの冬ふゆハはりしたた

秘文也

式ハ又多礼のありま礼をまゝうさ礼を欠限

又唐装束は時今唐装束唐絹又依りて下装

二好

中山

此の好年 ありてん此やうき

猶老此後此に礼ありてん此の好年

法性寺版仰

賀茂奈ともしとてらうもに例幣の行幸にて

り 史書に 此事 秘文好也

普賢寺版 遠久九年 史を史原 洞窟 宝治元年

史を史原 祿念院版 文永六年 史を史原 史を史原

四十一

諸家装束文已下

花山院

久我

徳大寺

西園寺

二好

此の好年 ありてん此やうき

二條

史を史原 祿念院版 文永六年 史を史原

史を史原 祿念院版 文永六年 史を史原

史を史原 祿念院版 文永六年 史を史原

史を史原 祿念院版 文永六年 史を史原

史を史原 祿念院版 文永六年 史を史原

此抄室所版御本也 長祿四年春此白尾有御返下松

宅事 相待御使逗留仰祝補御 史を史原也此奥

控雖有之若返上之乃不徒馳筆

一将衣色々

唐綾

花田の下の色々人の云りなり
公卿あはれを記す

唐織物

款冬

冬に咲く花并ぬ花黄ゆきと
まらまら紅基よりうてはるまら

赤色

まらまら黄ゆきと
まらまら紅基よりうてはるまら

大色

萌木

女郎花

七月月赤いれを記す
おきてまらまら

朽葉

道青 黄ゆき葉 面記り
まらまら黄ゆき

二藍

薄色

おきてまらまら

柳

おきてまらまら

梅

おきてまらまら

紅梅

おきてまらまら

黄柳

おきてまらまら

蒲萄

おきてまらまら

藤色

おきてまらまら

松重

おきてまらまら

紅葉

おきてまらまら

清黄紅

おきてまらまら

紅葉

おきてまらまら

紅葉

おきてまらまら

紅葉

おきてまらまら

秋山吹 白黄多ら紅

角

紅葉色 赤くハ三月ハ赤と云

花橋 白して朽葉以りて紅や黄也 赤り何と云

柑色 赤てうりまら何と云

香 赤くこく何れり

檜皮 面吹わりのまら何れり 赤くこく何れり

海松色

花田

青丹

薄青

木賊

黄青裏 赤てかきまら何と有まら二藍
若色
茶深 換非違使別當 執負仇赤れと云

比曹具也

浮線後

麴塵織物

虫襖 面吹とまら何と云 赤り二藍

秋山吹にまら何と云

呉綾

裏山吹 白黄多ら紅

水色

生練貫

練青

練薄物

頭文抄

木蘭地

白襖

雲母互

蕨芳香

りりり

二藍

一 控ね 二 控ね 三 控ね 四 控ね 五 控ね 六 控ね 七 控ね 八 控ね 九 控ね 十 控ね

やほぬん

白
黄
赤
青
紫
黒

ん

白
黄
赤
青
紫
黒

白
黄
赤
青
紫
黒

つゝ元ても名ははれけり

ゆふん

白
黄
赤
青
紫
黒

卯花

白
黄
赤
青
紫
黒

昌蒲

白
黄
赤
青
紫
黒

やまひ

白
黄
赤
青
紫
黒

ゆら 控ね 白
黄
赤
青
紫
黒

まらふぬん 白
黄
赤
青
紫
黒

ふ化花 控ね 白
黄
赤
青
紫
黒

秋 紅梅 拵てはわきま ちりぬき

を更ぬき 向ひをわきま ぬき黄色より青うき

七月 じしーゆい 拵てはわきま ぬき 裏二藍より秋ぬき

せり葉 向ひわきま ぬき 紅ぬき黄也

はわきま 拵てはわきま

もあがり 反秋ぬき

ぬきぬき 拵てはわきま

ちりぬき 向ひわきま ぬき ちり黄ぬき

何よりぬき 拵てはわきま ぬき 日一文を

詰色 向ひわきま ぬき 二藍

ちりぬき 向ひわきま ぬき 花田

何よりぬき ちりぬき

志をん色 拵てはわきま ぬき 青若人 ちり拵ては

梅 拵てはわきま ぬき

紅梅 拵てはわきま ぬき

黄柳 拵てはわきま ぬき 色れぬき

名心ぬき 拵てはわきま ぬき 花田

はわきま 拵てはわきま

ちりぬき 拵てはわきま ぬき 故曾文

拵てはわきま ぬき

宇治の御幸時今出川相國は社を以てぬ

小笠かちりぬき ちりぬき 装束を交

ちりぬき ちりぬきを交ぬき ぬき

五ノ人の由一ぬ記

此御抄室所藏御本也。長祿四春比白地有
被送下私宅事相傳御使の簡命林時
者抄御僧聊所字返也雖有此奥若返上之
間終切者也

此一冊以或人本書字

于時乙亥十二月二十二日

勘解由次官藤原名

此一冊勘解由由次官光輝為秘書之處
借來書字早以必可秘之者

于時文化十三年三月十六日

左兵衛權佐藤原判

石之一冊雖為祕書未便書字之畢

文化十五年春二月

平宗跡

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '平宗跡' and '文化十五年'）

此年云此銘任事書之

御判

禁中御翰布衣例

季部王記云天慶六年二月廿九日温明殿前_三有御翰事

當世得其名軍殺十余人布衣烏帽子_ヲ着_{セリ}

布衣事

撰集祕記云布衣太上天皇已下隨便服用之每所限之

張裏仕年之人用之但舊例每過失高年多着之生白裏

宿老後用之近來老_々用之不可差別事也

一織拵衣

久我内大臣通親公仁安三年三月八日記云大納言教命四采之後織

拵衣雖令着不得意汝拵不可着

一布拵衣

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '布拵衣' and '久我内大臣'）

通方卿抄云極熱之此勿論依時依人然其一門中亦有此
人の為る。宜也此の就人者不の就。平九年十二三秋故後相具
合春六条後給行葉布狩衣結給直く着く先院徳政御時夏比
上下多着く壯年之人或指廣結也白組也

一 張裏鴈衣

保元中細言中将春日祭上卿下向日中山内府干時中将着縹
張裏狩衣薄色指貫白衣二同卓

一 白裏狩衣

或書云白裏狩衣故人雖衰老於悼之近代嬰兒多着之
後成入道沉倫不居顯官叙累及四十之後着白裏狩衣侍從
大納言成通卿泰會院見之白裏狩衣色如不之後

流傳是衰老先前途之由然以之思之侍從少將亦不可着
依近代之衝兼宗忠季等侍從少將之時着之平治元年春日
祭上卿下向日中山内府干時着縹白裏白衣白草衣

一 長縮狩衣

長縮狩衣、經大澤く人着く其
外我身至極カト思人着く先達所也
或書云宿老人可着之但檢非違使別當雖年若必定着之於
公卿成如れ、着用無憚後上人者四位中亦可着之也又後三ヶ
國受領者着く之近代不可然然醫師陰陽師等着者非正
長縮色之縮也三云ハ如笋縮也

狩衣色

白青

表裏同表練薄物後也或浮織裏粉張之不論老少不嫌四季

萌黄

面裏同裏川搦若之也至十七八廿三着之

二蓝 二蓝白裏晴町着之故実八中倍
不純く裏白透面之白ノ思也

面裏同表濃花田 有以裏引搦年終同萌黄

赤色

表蕨芳裏濃花田 或者裏若色也
二蓝

花田

面裏同壯年人濃老人薄濃花田 師花田 及貳十余可
着之白裏 自四五十着之 或者卅着之

香

表裏同白裏 五十余人着之

木賊

表黒青裏白白裏老色也五十余人可着之

黒木賊

裏白祝之時不可用之

薄青

表黄青裏青師薄青 三四十人着之 白裏 五十余人着

之 松之り 凡人 青之 師薄青 一々 年々 之り 薄之 濃

心 社 之り

薄色

表薄花田赤之り 之り 一々 裏濃 師薄青 至廿余着之 白裏

卅已満人着之

檜皮

表蘗芳裏二藍老色白裏此之後着之

表薄紺裏同及五十余六人可着之白裏又老色也

蘗芳

二藍乃於赤之何所也

蘗青

表白裏青三四十之人着之

青苔青冊

青黒

苔色ニカイロ

表濃香裏二藍若頗老着之不論其冬

比金青

宝治二年十月廿日宇治御幸大宮大綱言二相卿供奉比金襖将衣

着之件色面黄青頗有黑氣裏用青色加川乃利衣唐花紅

川立烏帽子有平礼同

檀

表赤色裏黄若色也年々人又十七八人着之秋末冬初着之

朽葉

薄紅黄光

青朽

裏青

紅梅

表紅梅裏蘂芳若人着之

白梅

面白裏蘂芳

柳

表白裏青若老毛着之

梅

面白裏薄色或名若色卅許三毛着之

樺梅

表薄色裏濃薄色裏赤毛可有十七八三着之

梅萌木

面萌黃裏二藍自樺梅頗若也

卯花

表白裏青

春子柳林号

鷄冠木

表裏同

花檣

面黃裏青

躑躅

面紅梅裏青

棟標

面薄色裏青

菽

面薄色裏青

或云面襖若乃廿許、二十着之

女郎花

面黃裏青秋初可着之至十七八着之

海松色

面黑裏青光色也老人裏二藍或白裏光色也

虫襖

莖青

面青裏二藍或濃薄色廿許人着之自其顯若人不可有若
或人記云虫襖拵衣秋晴令着也其外不用但奈使中々之也
盡一付或令着之

白菊

青白裏青秋末冬初着之若色也

黃菊

面黃裏青

紅葉

面赤色裏濃赤色

黃紅葉

面黃裏黃也但青裏ラモ付也

枯色

表薄香裏青自冬至二月許可着之若_モ顯老_モ着也或力
松_モ比_モなり

松重

表青裏襖芳或大濃薄色赤可有十七八着之冬色也
或云表萌木裏赤色

冰

青裏白但表只張之裏板川也或表裏共用川糯半在平

一依四季可着色

春 紅梅 白梅 柳 梅 萌黃 梓梅

夏 卯花 鷄冠木 躑躅 棟

秋 萩 女郎花 秋初 海松色 虫青 白菊 黃菊 秋末 紅葉

苗紅葉

冬 枯色 松重 冰

一不論時折節可着色

白襖 二藍 萌木 花田 薄色 薄青 檜皮 赤色

青丹 香 朽葉 淺黃 苔色 海松色 襖芳 木賊

一祝之時可用色

松重 海松色 白青 二藍 萌黃

一聲取之時可忌色

薄花田 薄色 赤色 香 淺黃 梅 枯色 苔色 薄色

一移徒之時可掉色

赤色 檜皮 苔色 萌木 薄青 梅 淺黃 香

一常不可用色

黑木賊 比金青

一用布狩衣色

白張白張布持衣九月香 二藍 紺 萌黃 赤朽葉端裏之

女郎花色 青 藜芳 朽葉 薄青 或云布持衣 朽葉

香用之 二藍ラモ着欵常 不步任布持衣 織物持費着久

能見也 只持費 頗貪氣有之欵

一 侍持衣色半

赤色 二藍 花田 虫襖 薄青 藜芳 香 檀 赤檀

檜皮 木賊 薄色 海松色 篠青表青 氷 花田卒定 已メ二口

薄青重代宿老侍 海松色 木賊十卜ラカ 七着半 常半也

又一日晴持衣付練貫又五位侍着用香持衣半晴之外細

不可用之

一 袖結事

有裏持衣如常練裏持衣若 差生結也 或書云薄平結三四五以

後人不可差シ 但於六位 雖有裏持衣可差着 援結是祕說也

布持衣結事 壯年人青村濃紫分 濃中年人濃村濃老人白

也四十九人 壯ウ早速 五十五已滿可宜軟着白持費人袖結可白也 但雖

壯年人於有也持衣香花田二藍 用白緩結常事也 或村濃如常

幼稚人或薄平或直結也 直結ト 毛振形ノ形系ラフ 其中

或飛枝或草色 結之也 正下四位中將 雲各極官位也可着白

裏持衣可差組分結也 為年少者持可為薄平欵細結不可

用之

一 折吹反事

向云袖端折吹反折事 其故如何 又持衣可折折 卷云於吹反

表裏色替之時、雖為何色結構之日可折之、淺嫩内吞、
命云、淨寺入道德大寺、凡府中之後、使時行向、練童、
及寺或及德大寺不可及、然之由、亦云、淨寺何様、毛可一樣、之由、
亦云、淨寺何様、毛可一樣、之由、亦云、後案、不可及也、待
布衣、裏結時、及、ト、為見及、之、然、衣、折、衣、不可然也、

一、衣色事

紅梅、藤、若、為藤若、萌黃、或記云、萌木衣、白、薄、薄色、紅、此、看、行、家、以、由、執、

吳、後、綠、苔、黃、衣、白、衣、山、吹、練、貫、後

一、單、衣、色、事

濃、紅、白、青、黃

假名、裝束、
かり、ね、う、
の、ま、は、く、
の、ま、は、く、
の、ま、は、く、

向云、布衣、出、萌、木、單、半、者、不、然、何、之、色、單、可、也、答、云、

の、ま、は、く、
の、ま、は、く、
の、ま、は、く、
の、ま、は、く、
の、ま、は、く、

萌、木、單、半、一、分、論、紅、單、白、單、例、事、也、其、外、藤、若、濃、單、亦、有、
之、又、向、云、上、結、時、於、初、若、單、半、者、亦、答、云、遊、返、半、分、細、

細、未、見、及、也

一、大、帷、色、事

白、萌、黃、香、藍、摺、紅

一、帶、色、事

冬、躰、濁、夏、二、藍、之、卿、以、下、禁、色、人、赤、色、其、外、二、藍、也、白、生、帶、若、六、位、之、人、晴、時、可、

用、之、但、地、下、六、位、常、用、半、祕、說、也、又、一、日、晴、之、取、用、錦、半、半、
有、之、或、記、云、凡、狩、衣、帶、切、下、斂、裾、用、之、仍、隨、其、色、之、卿、若、
禁、色、四、位、五、位、有、文、赤、色、非、禁、色、四、位、以、下、地、下、人、亦、每、文、二、藍、也、
青、色、帶、以、着、青、朽、葉、下、斂、人、用、之、向、云、如、柳、梅、狩、衣、着、之、

时及冬节半有之其故如何若为替色欤然何白襖之
时不用之外可用何之布衣时可不答云白襖之不及半未
见及不存知

一奴袴下袴木色半

在直衣篇仍不注之

近来细之用習持衣色

梅 面白裏襖方自五月至二月着之欤

榉梅 面白裏襖方自五月至二月着之欤

柳 面白裏青四季通用和花菊

花山吹 面白裏青四季通用和花菊

已上春季可着用此色欤

梅 面白裏花色梅裏是也自五月至三月欤

榉萌木 面白裏二蓝时节同榉梅

裏欵之 面白裏红自五月至三月但袴衣春季用之

藤 面白裏青三月用之四月同通用之

盧橘 面白裏青四月五月着之

棟 面白裏青四月五月着之

桔梗 面白裏青五月六月着之

萩 面白裏青时节

已上夏季可着用此色欤

檀 面白裏青时节

黄菊 面白裏青时节同乾膽

白菊 同梅子时节同黄菊

青紅葉 面白裏青时节同乾膽

已上秋季可着用此色欤

松重 面白裏青时节同乾膽但秋季不可有倅也

昌蒲 面白裏青时节同盧橘

瞿麦 面白裏青时节或表用红梅丙说也四五六月着之

女郎花 面白裏青六月月相祇園日着之秋季通用也但九月於袴衣非常之事欤

乾膽 面白裏青时节同黄菊

叶菊 同柳子时节同黄菊

移菊 面白裏青时节同右

黄紅葉 面白裏青时节同右

枯色 面白裏青

枯色 面白裏青

自師馳至三月欵但五節表着間用之欵又三月着用間有之
此等例近曾雖不可^{商字}近來候不可及也難欵他色又如此扣遠不
可勝計為欵

青丹 濃青差黃表裏同色

赤色 面穠芳裏深

二藍

薄青

香

海松色

已上不定時節欵

虫襖 一說為玉虫色但夏季着否
存畧候欵

苔色 面香裏二藍

白襖

萌黃

縹

檜皮色

木賊 青黃白黑

朽葉 面欵个裏黃

茶深

同衣

黃青裏 自秋至五節欵

薄色 時分不定

江衣 裏中紅梅衣紅草亦欵号紅
白裏白衣白草亦時号紅房積

紫衣

付櫻裏之時号蒲萄深裏薄紫衣紅草之時号紫白
重為衣為草之時号紫房積

欵个 表紅裏黃表房朽葉之附
号花山欵

白衣

指貫

橙

萌黃 自五節至春或方若鷄冠不
入四月同之

黃衣 春季着否有吳侯欵或

紅梅

裏濃穠芳 不定時分

紫冬 半色 薄色 淡黃 青色 二藍 夏
 紫苑色 反或号房色 或裏青 瑠璃色 夏 白色 近代希
 青鈿 半二重 半葉色

本云
 以陽明本書寫本

應永己卯曆應鐘三五天以云發陳任本駝筆者也

鶴首在大美藤原判

應永世年南昌五、借請一位大納言 魚宣卿自筆寫本
 深命管城毛錐子掃鴉胡、于時清風汎、頓挑一點、
 殘燈秋夜沈、既曉三更和鐘焉

鳳城龍官藤原判

康三年姑洗念五日借請前内槐 内房云 自筆本以他筆書寫
 早如右與書者祖入道殿御抄之正本撰失之間重取字至
 也三春與漸盡百葉香已稀矣

諫議蘭臺藤原判

右裝束抄 將衣草者 以前中納言 時方卿 秘藏本自字之、
 不審、任本者也 且為不違文字之懸合透字畢

寶永四年仲夏念四 參議右中将藤原判

右以廣橋重相 魚原 傳來之古本重而校合改直文字
 訖、以可深秘者也

享保第四曆仲秋下浣 從二位藤原判

うせりぬき禁 村をいかにしうせりぬき禁

むしき むしき

十月一日より花りぬき禁

菊のむら 村をいかにしうせりぬき禁

ふくじ 又むしき

らむ井田葉 らむ井田葉

ふり ふり

うせりぬき禁

せり うせりぬき禁

けり うせりぬき禁

らむ うせりぬき禁

かえり うせりぬき禁

りり うせりぬき禁

ま うせりぬき禁

五節 うせりぬき禁

し うせりぬき禁

らむ うせりぬき禁

う うせりぬき禁

う うせりぬき禁

うせりぬき禁 村をいかにしうせりぬき禁

むしき むしき

十月一日より花りぬき禁

菊のむら 村をいかにしうせりぬき禁

ふくじ 又むしき

らむ井田葉 らむ井田葉

ふり ふり

うせりぬき禁

せり うせりぬき禁

けり うせりぬき禁

らむ うせりぬき禁

かえり うせりぬき禁

りり うせりぬき禁

ま うせりぬき禁

五節 うせりぬき禁

し うせりぬき禁

らむ うせりぬき禁

う うせりぬき禁

う うせりぬき禁

山あはれ うへはあき山あはれもさういふに
よめは書かぬ

うへ山あ おれしこゝろをさすこゝろ
山あはれをさす

貴山山あ うへ山あはれをさす
山あはれをさす

いん おれしこゝろをさす
いんをさす

梅を福 うへ山あはれをさす
梅を福をさす

雪の志 おれしこゝろをさす
雪の志をさす

しん おれしこゝろをさす
しんをさす

二笑 うへ山あはれをさす
二笑をさす

あ うへ山あはれをさす
あをさす

ほい おれしこゝろをさす
ほいをさす

さ おれしこゝろをさす
さをさす

いん おれしこゝろをさす
いんをさす

さ おれしこゝろをさす
さをさす

さ おれしこゝろをさす
さをさす

ほい おれしこゝろをさす
ほいをさす

四月のうしせなよふ

いん おれしこゝろをさす
いんをさす

さ おれしこゝろをさす
さをさす

藤 うへ山あはれをさす
藤をさす

ほい おれしこゝろをさす
ほいをさす

いん おれしこゝろをさす
いんをさす

卯 おれしこゝろをさす
卯をさす

此の... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

志願... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

本... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

ま... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

わ... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

五月の... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

志願... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

し... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

う... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

花... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

な... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

か... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

六月... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

そ... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

う... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

わ... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

と... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

ま... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

ら... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

七月... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

な... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

わ... 村にてもういにもめていてこころにりて二重にうらな井戸

八月十五日までのひびきかた

うき舟のしとる 花うきよおし

いふれのもも 花うきよおし

まふま まふまのうきうきよおし

まんまん まんまんのうきうきよおし

あく 花うきよおし

紅葉 花うきよおし

八月十五日より九月八日まで

花うきよおし

うきもあ 花うきよおし

あけふ 花うきよおし

あく 花うきよおし

りそう 花うきよおし

九月九日

うき舟のしとる

うきよ

うきよ

石一帖依 仰以家記書寫獻上平

享保二十年三月十八日

從二位藤原永房上

此女房衣色目高倉家之祕說也一日以不慮求得
之製悉筆了之可祕藏者也

延享五年六月初三

藤判

此女房衣色目假名裝束抄

振書也按可考具

石裝束抄 將衣卓 並女房衣色目等二冊以中臣光久
所持本合書寫強可祕者矣

文政四年己年初春

平宗跡

石一... 仰以... 宣和...

... 卷之...

此書... 卷之...

... 卷之...

... 卷之...

... 卷之...

... 卷之...

... 卷之...

